

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）

県政の課題（テーマ）報告書

令和 7 年 8 月 19 日

山梨県知事 殿

氏 名 加藤真央

留 学 先 フランス共和国

留 学 期 間 令和 6 年 9 月 1 日

～ 令和 7 年 7 月 23 日

1 県政の課題（テーマ）

富士山周辺のオーバーツーリズム緩和に向けたスローツーリズムの可能性

2 概要

県政の課題（テーマ）を解決に導く考え方及び対応策等

はじめに

筆者が論ずるテーマは、富士山周辺におけるオーバーツーリズム緩和に向けたスローツーリズムの可能性とその実装方法である。本稿では、ゆったりした旅のスタイルが地域と観光客にとってサステナブルであると仮定したうえで、スローツーリズムの社会実装に以下二つの視点が重要であると提唱する。一つ目は市や自治体によるトップダウン型の都市整備、二つ目は市民や NGO から始まるコミュニティデザインである。まず第一章ではフランス・トゥールーズ市の都市計画が住民、観光客の生活をどのように改善するのかについて検討していく。第二章ではボトムアップ型の手法として農泊を取り上げ、その可能性を考察する。

第一章：市や自治体によるトップダウン型の都市整備

本章では、トゥールーズ市のモビリティ計画とインクルーシブな取組に言及し、市政がいかにしてスローツーリズムに影響しうるのか検討する。フランス五大都市の一つである同市は、観光資源では世界遺産のミディ運河やサン・セルナン大聖堂、産業では旅客機で有名な Airbus、スポーツではラグビー観戦とピレネー山脈のトレッキングと、毎シーズン多くの人がこの街を訪れる。トゥールーズ市のこうした観光的に特色ある環境は、スローツーリズムの実装に市・自治体が受け入れ体制を整える重要性を示唆してくれた。異なる目的を持つ人々が一つの場所で行動するには、場所と場所を円滑に繋ぐこと、そして人とサービスを密接に繋ぐことが肝要である。

人の流動性と権利への近接性を高めるという視点から都市整備の実装例を考える。トゥールーズ市では Tisséo Collectivités が管轄する公共交通機関のサービスが人

の流動性を高め、スローツーリズムに貢献している。更新式交通カード Pastel の購入でバス 82 路線、2 つの地下鉄、2 つの路面電車、ロープウェイを利用できることは、中心から離れた博物館やスタジアムへの移動を容易にしている。同じく Tisséo が提供するシェアサイクルのサブスクリプション Vélo Toulouse は、市内に 385 個あるポートにて自転車か電動自転車にアクセスでき、移動経路の分散を可能にしている。

交通手段が充実するほど移動における混雑が緩和されるのはもちろん、同時に人々の平等性を高める点にも言及したい。とりわけバスや地下鉄の存在は、年齢・性別・出身・階層・障がいの有無に関わらず移動できる社会であることの根拠である。地域の中でも特に脆弱な集団—失業者、移民、高齢者—が疎外されることなく交通インフラの恩恵に預かれることは富が再分配され、平等性が担保されている表れだろう。また、工場労働者向けの低所得者住宅が立ち並ぶフランスの郊外は、社会経済的に弱い層が集中する場合が多い。フランスではこうした地区を QPV（都市政策地区）に指定し、公平な資源分配を可能にしている。地域の社会的不平等を特定し公平な施策を実施することで、地域間の断絶が緩和され地域全体としての魅力向上を望むことができる。

こうした恩恵を受けているのは住民だけに限らない。交通の利便性や開放的な風土は、観光客の満足度にも大きく影響する。例えば、2028 年に運航予定の地下鉄 C 線は空港・市内・列車の駅を一つに結ぶ。この線が開通すれば旅行時間が増加し、観光客に新たな観光ルートを提案することが可能である。街のモビリティが高いことは観光客に時間の余裕を与え、観光の幅を広げることに繋がっている。

第二章：ボトムアップ型の手法としての農泊

筆者はフランス留学の間に三軒の農家宅に滞在し、スローツーリズムの可能性を探ってきた。一般的に農泊と呼ばれる観光の形は、市や自治体に限らず個人や NGO といった主体によっても運営されている。本章では農泊の利点を実体験を踏まえて論ずるとともに、グリーンツーリズムとしての「ゆったりとして豊かな旅」を模索していく。

筆者が感じた農泊の独自性は次の三点にまとめられる。①宿泊ではなく、農業についての知識を多様化することやライフスタイルを学ぶことが目的である、②滞在が一週間以上の長期間に渡る、③地域や住民との縁が深まりやすいことが挙げられる。観光地をめぐり消費活動を行う従来の観光に比べ、一つの地域に留まりながら学びを得る部分が強調される。自然に触れたい人、ボランティア、農業従事者、農泊する背景は様々であれど、生活を共にするという農泊の特性上他者との交わりの中に身を委ねられるのが魅力である。期限や固定概念といったものに囚われず、地域と生きる人の営みを間近で体験することは、訪れる地域に息づくものへ最大限敬意を払う持続可能な観光の形だと言える。

ワイン農家、酪農家、家庭菜園を営む人と一緒に時間を共にして、筆者の地域についての解析度や第一次産業へのリスペクト、仕事に注がれる情熱への関心は次第に高まっていった。いわゆる余暇としての休息だけない農泊だが、その後の生活で思い出すような経験になったのは、一方的でないコミュニケーションの賜物だろう。また

異なる年代の主体と関わって様々な視点から農業を観察することができたことは、自分の凝り固まった考え方を柔軟にしてくれた。人が繋がる旅には機会の消費とは異なる豊かさがある。

農泊は地域観光の新たな方法と限定するよりも、田舎で暮らす文化の延長線上にあると感じている。都市ではない地方で土地に寄り添った生活に自然と共感するのだ。美しい景色に感動することと大きな違いはなく、紡がれた文化に思いを馳せてしまう心理、逆を返せば新たなものを作らずともここまで続いてきた文化には魅力があるということだ。フランスで農泊が盛んであったのも、休暇を田舎で過ごすという慣習や食に対する追求が根本にあったことに起因する。こうした点から農泊は文化の担い手である市民と相性がよく、その市民が農家個人として人と繋がれる WWOOF のような NGO の活動が普及している。観光を考える上で、個人やコミュニティの存在は地域の風土を形作る根源であることを忘れてはならない。

ここで示したグリーンツーリズムは従来の観光形態に代わる一つのモデルに過ぎない。特定の観光客に「ゆったりとして豊かな旅」を提示するだけでは、サステナブルを基盤にする観光は浸透していかないだろう。地域や住民が消費されることなく、観光の中で生まれる相互作用に焦点を置く観光スタイルが普及するべきだと考える。

おわりに：山梨県の観光

ここ十数年の富士・河口湖エリアの人気は留まることを知らない。世界文化遺産の富士山を中心に、レジャーを楽しめる河口湖、フォトジェニックな新倉山浅間公園の展望デッキなど、国内外の観光客を魅了する場所であることに異存はない。しかし、観光客の一極集中による地域への負担、観光の質の低下、オーバーツーリズムは地域の人的・文化的資源を摩耗しているようである。また、富士・河口湖だけを見てほかの都市に移動するインバウンドが多いことも、山梨全体の魅力が伝わり切っていないようで惜しい心持ちである。本稿で検討したスローツーリズムとその実装例が、山梨全体を生かした観光の足がかりにできることを期待し、今後も山梨の魅力と観光のあり方について考察を深めていく。

	
<p>ラバスタン市のマルシェで有機ワイン販売</p>	<p>ワインの瓶詰めの手伝い</p>
	
<p>家庭菜園を持つ夫婦の下で収穫の手伝い</p>	<p>有機酪農家の下で搾乳や掃除のボランティア</p>
	
<p>戦後、移民労働者増加に伴い建設されたトゥールーズ市の団地地図</p>	<p>同団地から一番近いメトロ駅内部</p>